

## 書評

ジェレミー・マンデイ(鳥飼玖美子監訳)『翻訳学入門』[みすず書房 2009年:363頁 ISBN978-4-622-07455-7]

柳父 章

翻訳学 Translation Studies は新しい学問である。およそ20世紀の後半以後、西欧を中心に、各地の大学に専門研究の学部などができ、言語学や比較文学などの研究者が集まり、学会も立ち上がってきた。背景には大戦後のグローバリゼーションの中で、異言語がかつてなく広範に出会うようになったという状況があるが、新しいだけに、この学問の性格、方法なども、研究者各自さまざまで、「翻訳学」とは何かという見通しも必ずしも明らかではないのが現状である。

本書は、こういう背景の中で、あえてこの学問の全体を見通そうとした試みである。「概論」とか「入門」は、まだ困難な見通しの中で、先頭を切って現れてきた研究書の一つである。それで、今日、世界各地の大学などで教科書として広く使われているようだ。

本書の構成は、およそ時代順に、翻訳論の各流派の主張を簡潔に紹介している。Translation Studies という呼び名が定着したのは新しいが、その淵源を辿って2000年ほど昔にさかのぼるあたりから始めて、今日欧米を中心に盛んな研究の紹介におよんでいる。

取り上げられている各研究者、その主張は多数で、また多様であるので、この書評でそのすべてを紹介するのは難しい。それで、ここでは、かなり主観的に、日本の翻訳にとって重要と思われる視点から考察してみたい。

翻訳論が自立した学問として評価されるようになったのは、20世紀後半以後のことであるが、それにやや先立って、独自に翻訳の問題を論じていたシュライエルマッハー Schleiermacher の意見が紹介されている。著者マンデイ Munday は、シュライエルマッハーの「影響は絶大である。」と言っている。その意見は要約すれば、「作者をできるだけそっとしておいて、読者を作者に近づける」方法である。これは、ローマ時代、キリスト教の聖書を翻訳した聖ヒエロニムス Hieronymus の翻訳観を受けついでいた。「読者を作者に近づける」とは、聖書の言葉に近づける、という意味が背景にあったと考えられる。シュライエルマッハー自身、プロテスタント神学の大成者でもあった。そして、この影響は、スタイナー Steiner、ベンヤミン Benjamin、などから、現代の代表的翻訳理論家、ヴェヌーティ Venuti にまで及んでいる、とマンデイは述べている。

こうして概括してみると、西洋の翻訳論にとって、キリスト教聖書の翻訳が極めて重要であると理解できる。

およそ世界の翻訳の歴史で、キリスト教聖書の翻訳はもっとも量も多く、影響力も大きかった。宗教的文書の翻訳は、世界各地で歴史上いつも熱心に行われてきたので、翻訳論の中心テ

一マなのだが、中でもキリスト教は、宣教に熱心であった。キリストの死後、弟子たちは中東の各地に散って、異言語の人々に宣教を続けた。ただ一つとされる神の言葉を、異言語の人々に伝えなければならなかったのだ。人々の言葉が互いに通じないのは、神から離れて人々が墮落したせいである、と考えられた。旧約聖書のバベルの物語はそのことを語っている。スタイナーの著書『バベル以後』 *After Babel* は、この物語を受けて書かれ、現代でも代表的な翻訳論として広く読まれている。

シュライエルマッハーに始まってヴェヌーティに至る原作者重視の翻訳観は、要約すれば「異質化」*foreignization* という用語で表現されるだろう。「異質化」は、読者重視の「受容化」*domestication* と対比されて論じられている。この翻訳観は、現行の翻訳を批判する立場から発言されているのだが、とりわけヴェヌーティは、現在のイギリス、アメリカでの翻訳が、英語で読みやすい翻訳が重視され、異言語、異文化を軽視するようになっている傾向を厳しく批判している。いわば英語帝国主義が翻訳界を支配している傾向を「受容化」として嘆いている。

こうしてみると、「異質化」という翻訳観は、元来キリスト教の教えを背景として出発していたのだが、現代では、キリスト教の本拠とも言うべき西欧世界を批判することになったわけである。この翻訳観は、さらにポスト・コロニアリズムと言われるニランジャナ *Niranjana* などの翻訳論にもつながっていて、現代翻訳論の有力な潮流となっている。

ところで、本書の理解から、では日本の翻訳を省みるとどうなのか、という私の意見を述べておきたい。日本は、古代における仏教、儒教の伝来以来、漢字、漢文に頼った受容方法で、異言語、異文化の教典を理解してきた。これを私は、「日本的翻訳」と考えている。異言語、異文化の意味内容は、もっぱら漢字の中につめこんできた。近代以後、西洋の学問、文化も、同じような方法で受けとめられ、今日にいたっている。この「翻訳方法」は、「受容化」でないことは明らかだが、では「異質化」と言えるのだろうか。漢字は古代以来の歴史の中で、日本語の中に取り入れられ、日本語の一部となっている。しかしまた、漢字は、やまと言葉とは明確に区別されていて、漢字の用語がもと中国語であるとは、小学生でも知っている。日本語の歴史は、伝来のやまと言葉と漢字とを、常に区別しつつ共存させてきたのだった。これは、日本語が、言語の構造として異質な外来の言葉を取り込んできたのだ。いわば本質的に「異質化」可能な言語なのだ。言い換えれば、世界でも稀な、翻訳に適した言語だったのである。

本書は立教大学異文化コミュニケーション科の鳥飼玖美子教授の門下の教員、院生など 8人で分担してマンデイの原書を翻訳している。内容は、始めにも述べたように「翻訳論」という新しい学問の様々の意見を網羅的に紹介しているので、一貫した筋で紹介するのは極めて困難であろう。その上、各章は8人で分担しているの、訳語、文体は、必ずしも揃ってはいない。そのまとめの仕事をした監修者鳥飼先生は大変だったろうと推測する。

翻訳論は、日本でもようやく起こり始めた学問なので、適切な案内、紹介の教科書が今求められている。本書はそういう時代の要望に答える本となるだろう。

.....

**【著者紹介】**

柳父 章 (YANABU Akira) 評論家。専門は翻訳論、比較文化論。著書に『翻訳語成立事情』(岩波新書)、『「ゴッド」は神か上帝か』(岩波現代文庫)、『翻訳語の論理』(法政大学出版局)、『翻訳の思想』(ちくま学芸文庫) など多数。

